
化け物狩りの殺し屋

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け物狩りの殺し屋

【Nコード】

N5482Z

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

2035年、人間は忘れられない事件を残した。その事件に関係する人間は全て消えてしまった。そんな事件である4人人間が消えた。

プロローグ

「ふわぁ…眠い。」

一人ののんびり者の少年——。

「ちょっと！早く、しないと遅刻するわよ！！」

一人の真面目な少女——。

ガタッゴトッ

「…つまんない。」

一人ぼっちな少年——。

「ん？主様！！おはようございます！！」ニコッ

森に住む一人の狼の少女——。

そして…。

「…………。」

一人、洞窟で封印されている少女——。

犀王寺 裕さいおうじ ゆう

高校1年生の男。

のんびり者でマイペース？

寝ることしか頭にない。

ある事件に巻き込まれる。

そうがみや のどか
蒼雅宮 長閑

高校1年生の女。

しつかり者で真面目で強がり。

成績優秀。裕と幼馴染で裕のお世話係り。
ある事件に巻き込まれる。

むぎたに れいあ
無北式 玲夜

高校1年生の男。

無口で暗くて笑わない。

いつも一人。ゲームをするのが好き。
ある事件に巻き込まれる。

なぎ
薙

15歳の女。

明るくて優しくて元気。

人間観察が大好き。

狼族の血を引く。

15歳になると人里に下りなくてはならない。
ある事件に巻き込まれる。

この人達はある事件の関係者。

そして、洞窟に眠る少女も関係する。

1話 片目がない少年（前書き）

この小説は結構物語が難しい？ので、更新はいつもより遅いです。

1話 片目がない少年

「Z Z Z Z。」

寝ている少年の名前は『さいおうじゆう犀王寺裕』
右目には包帯を巻いている。

そして、寝ている裕の上で目覚ましが鳴る。

「ん?…もう6時か?。」

裕は、目覚ましを止め起き上がる。

家は静かだった。

「はあ…おはよう、母さん、父さん」ニコッ

裕はお供え物と朝のあいさつをする。

裕の両親はなくなった。

「飯…飯…パン、あったつけ?」

そして、裕の携帯がなった。

「ん?メールか?後で見るか。最初は飯だ。」

裕は出際良く、料理がとても上手だった。

そして、パンにジャムを塗り、学校の用意をして出かける。

時刻07..00———。

裕の家は学校から遠く、いつも早く家を出る。

家の鍵を閉め、さっき来たメールを見る。

「!?!?。」

そして、裕は驚いていた。

メールの内容は。

「犀王寺裕様へ

あなたを望みを一つだけ叶えて差し上げましょう。

その代わりの対価をあなたには払ってもらいます。

来るのでしたら、今日の夜12時の幻電車に乗ってください。」

これがメールの内容だった。

「…これって…迷惑メールか？」

裕はあんまり気にしないで、携帯をポケットにしまい、学校に向かった。

そして、学校に着く。

時刻08..00———。

そして、学校の門では服装チェックをしていた。

「…はあ、相変わらずだな。」

「コラ！あなた、ちゃんと服装を整える！服装は乱さない！分かった？」

「長閑。おはよう。」

「あつ、裕、おはよう。って、ネクタイ曲がってるよ。」

長閑という人が裕のネクタイをなおす。

「うん、裕はいつも規則正しくて宜しい。」

「サンキュ！」

「後で昼ごはん、おごつてよおー！！」

「分かったよ！」ニコッ

二人は幼馴染で小さい頃から仲が良かった。

「うわあ、何？あの目。」

「包帯男？」

周りは裕の包帯をしている右目を見て、コソコソ噂を立てたりして
るらしい。

どうたら、裕の右目は他人からは”気持ち悪い”らしい。

「はぁ…。」

だけど、裕はあまり気にしなかった。

ただ、いつも物静かに平和に暮らしていた。

そして、携帯が鳴った。

また、メール。そして内容を読んでみる。

「：犀王寺裕様へ

先ほどもメールしましたが、これは真実。

あなたが電車に乗れば、あなたの望みは叶います。

嘘なんてついてません。対価を払ってくれば嘘ではありません。

」

こう書かれていた。

「：対価：俺の聞きたくない言葉…。」

そして、放課後。

裕は急いで学校から出る。

その時、門の前に立っている長閑を見た。

その時、長閑の手には携帯があった。

だけど、裕はそれに気づかずそのまま家に帰ってしまった。

時刻11..3—————。

「行くか…。」

裕は家の鍵を閉め、家の前で立ち止まる。

「：俺の望みを叶えてくれるんだって：だから俺は行く：その対価
つてのを払いに。」

裕はそのまま駅の方に向かって行った。

そして、誰も居ない駅。

人一人見つからない、ホームレスがいても不思議じゃない。だけど、誰も居ないし、電車も来ない。

「……。」

だけど裕はじっと電車を待っていた。

そして、電車が来た。

見た目は普通の電車と一緒にだった。

ドアが開く。

「お待ちしております。犀王寺裕様。」ニコッ

「……。」

そして、裕は電車に乗った。

2話 呪いの体の少女

少女の名前は『蒼雅宮長閑』そうがみやのどか

「おはよう、長閑。」

「おはよう。お母さん。」ニコッ

私と母は二人暮らし。

父は外国で転勤中です。

「ご馳走様でした。」

「もう行くの？」

「うん！帰りに買い物行くけど？」

「そう？じゃあ、今日は長閑の好きな野菜炒めにしようかしら？」
ニコッ

「ヤッター！じゃあ行って来ます！」ニコッ

「いってらっしゃい」ニコッ

長閑は学校に行った。

私の学校には生徒会というものが無く、委員だけで活動しています。
そして、私は風紀委員です。

「……。」

長閑はいつも一人で学校に行く。

時刻07..00———。

「……。」

長閑はいつも音楽を聴きながら学校に行く。

そして、携帯が鳴ったが音楽を聴いているので気づいていない。

そして、学校に着き、教室にかばんを置き、門に向かう。

「メール?…。」

そして、受信を見る。

『蒼雅宮長閑様へ

あなたの望みを何でも叶えます。

今夜12時の幻電車に乗ってください。

これは本当のお話。』

「!?!?…私の望み…をかなえる?…。」

長閑は携帯をポケットを入れた。

そして走って門に向かった。

「こら!ちゃんと服装整える!」

「おはよう、長閑。」

「おはよう裕、あつネクタイ曲がってるよ。」ニコッ

「ああ…悪い。」

長閑の幼馴染の犀王寺裕。

裕のネクタイを直す。

「ほら、これでよし。」

「サンキュな」ニコッ

「ううん。」ニコッ

裕にメールの事を言ってみる?…だけど…。

裕はそのまま、教室に向かう。

「…自分自身の悩みだしね…。」ボソッ

そのまま、長閑は裕を追わず、門で服装チェックをしていた。

私の…望み…。

「いけない！！教室に戻るよ！！」

「はい！！」

委員の皆は自分の教室に戻った。

「……。」

長閑は席についてから、ボーとしていた。

「おい！蒼雅宮！おい！蒼雅宮！」

ハッ！

「はい！！！！！！」

「ボーとしすぎだ、この問題答えてみろ。」

「えっと…あれ？…すみません、分かりません。」

「今日はどうかしたのか？」

「あっ…調子が悪いだけです。すみません。」

「まあ、いいんだが。」

ガタッ

席に座る。

あのメールが頭から離れない…。

今夜12時…行くしかないよね…。

「……。」

そして、放課後。

門の前で立ち止まってメールを見る。

そして、後ろから裕が慌てて帰っていた。

「…裕？」

そして、長閑も家に帰った。

裕、何に急いでたんだろう？…まあ、いっか。

時刻11..40———。

ガチャンッ

長閑は駅へ向かった。

母さんごめん、私は…。

そして、駅には誰も居なかった。

そして、電車が来る。

「!?!?。」

普通の電車を変わらなかった。

そして、ドアが開くと男の人が居た。

「ようこそ、いらっしやいました、蒼雅宮長閑様」ニコッ
「…どうも。」

そして、長閑は電車に乗った。

3話 感情が無い少年

『むきたにれいや
無北式玲夜』

ガタツゴトツ

一人電車の入り口で立っている少年が居た。
玲夜には”感情”が無かった。

暇な世界…歪な世界…。

「……。」

玲夜はいつもゲームをしていた。

カシヤツ

そして、ゲームで海の写真を取る。

「…綺麗だな…海だけは…。」ボソツ

こんな世界、別に興味なんていらなかった。
どうせ、汚れて壊れていくのだから。

タツ

電車が止まり、電車から下りて学校に向かう。

そして、ゲームをしている途中、メールが来た。

「…メール?。」

『無北式玲夜様へ

あなたの望みを何でも叶えます。

今夜12時の幻電車に乗ってください。』

「…。」

望み…をかなえる…。

タッ

一瞬動きを止めるが、再び歩き出す。

「……。」

そして、再びゲームをする。

「裕！おはよう。」ニコッ

「おっす、長閑。」

「……。」

裕と長閑が喋っている横を通りすぎる。

行ってみよう…その”幻電車”に。

俺には、感情が無い。

事情があるけど。

別に、感情はいらなかった。

「……。」

教室に行き、自分の席に着いた。

「……。」

玲夜はいつも一人で居た。

だけど、そのクールさが女子には人気があるらしい。
だから。

「あのっ…私と付き合ってくださいませんか？」
裏の廊下に呼びだされ。

「…君は俺の事なんで好きなの？。」

「えっ？…クールな所…。」

「…君って最低…俺の事そんな風に見てたんだ。」

「あっ！無北弐君！ごめん！私…。」

「そんなすぐ…謝る女なんて、興味ない。」

「?!…そんな…。」

そして、女の子は泣きじゃくる。

玲夜はそのまま去った。

興味ない。何て脆い存在。

そして、時刻11…50―――。

ガチャッ

「……。」

そして、玲夜は駅に行った。
誰も居ない。

そして、電車は来た。

そして、扉が開く。

「初めまして、無北式玲夜様。お待ちしております」ニコッ
「……。」

そして、玲夜は電車に乗った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482z/>

化け物狩りの殺し屋

2011年12月24日00時57分発行